

フィンランドの保育と共生の原理

—幸福の国の子育てをみつめて—

三井真紀

Coexistence Principle in Early Childhood Care and Education of Finland: Child care for the Nation of the Happiness

Maki Mitsui

1. 問題と目的

フィンランド共和国は、人口543万人（2013年現在）、国土の4分の1が北極圏に位置する世界でもっとも北にある国の一つである。フィンランド語で、自国のことはスオミ（Suomi）と表記され「森と湖の国」の意味をもつ。その名の通り18万の湖が点在し、森には白樺、松、トウヒ（もみの木）が茂って、四季折々の自然はこの国に豊かな恵みをもたらしている。現在、日本から9時間半で行き来することが可能になり「日本から一番近いヨーロッパ」として、観光やビジネスで訪問することも容易になった。ムーミンやサンタクロースの故郷として、サウナやキシリトール、オーロラ、北欧食器やデザイン、福祉国家でも知られ、しばしば日本のメディアでもとりあげられる。

最初に世界に大きく紹介されたきっかけは、2000年実施のOECD学習到達度調査（PISA）で世界一の成績を修めたことであった。学力世界一となったフィンランドは、教育を切り口にその生活や社会福祉についても注目され、今では海外からの視察が絶えない国の一つとなった。その後、2013年のNGO調査で「母親に優しい国」世界一、2018年3月には国連調査で「世界幸福度ランキング」世界一を獲得している。1998年にフィンランドの保育現場への介入をスタートした調査者にとって、この20年の様相にめまぐるしい変化をみる一方、北欧福祉国家として長く時間をかけながら、性別、年齢、出身、言語、信仰、健康状態を問わず平等であることを強調した、普段着のフィンランドの成果であるように感じる。

他方、移民の実態や、多文化共生社会の課題は、大きく変化しているといえよう。それは、フィンランドの保育をとりまく環境を少なからず揺るがしてきた。人びとの生活の変化は、大人たちの仕事環境を形作り、大きな流れとなって国の政策にも反映されてきた。しかしながら、その狭間にいる子どもたちへの影響は、実は長い間放置されることも少なくない。制度なき子どもの生活世界、保育と子育ての実態を探る。

本稿は、保育における共生という現象を、フィンランドの子育ての文脈を通して分析するものであり、フィンランド社会における移民の子どもたちの生活世界を学術的視座から考察することを目的とした研究の一部である。報告は、2017年8月から2018年8月に実施した7週間の現地フィールドワークの記録をエスノグラフィーの手法をもちいて分析した。

保育・教育現場における共生とは、集団同士、個と個が対等である概念を意味しており、それは同化主義と相反し、子ども一人一人が自己を発揮でき、主体的に活動が展開される環境構成の土台となるものである。では、共生社会を目指す中で、子どもの生活の場（ここでは保育・幼児教育がおこなわれる保育所、幼稚園、認定こども園等）での日常は、研究において現状で十分に把握・分析されてきたのだろうか。日本の過去の多文化保育、多文化教育の研究傾向でいえば、一定の蓄積はあるものの、先行研究の問題提起やアプローチに本質的な変化がみられない。たとえば1990年代に始まった本分野の代表的な研究は、文化摩擦論を入りに、外国人児童を

受け入れる際の日本側の体制の弱さを批判・指摘するものが多くを占める。さらに集団としての秩序の乱れ、適応に対するサポートのみに比重がおかれたものがほとんどであった。森田（2004）のアイデンティティー・ポリティックスに言及した研究や、宮島（2014）による子ども自身が家族や社会へ主体的に生きる様を捉えた研究は、躍動感にあふれた実証的研究であり、新しい研究モデルとなるだろう。また、三井ら（2017）による子どもの生活に根差した多文化共生の原理を探求する議論も継続が必要である。

日本の保育・教育現場で「国際化」という言葉が使われるようになったのは1974年中央教育審議会が答申「教育・学術・文化の国際交流について」を出して以降である（民秋，1998）。「多文化保育」「多文化共生」は、現在までに「多文化教育」「異文化間教育」「グローバル教育」「国際理解教育」などの言葉と重なりを持ちながら発展し、2018年施行の新しい要領・指針の中でも丁寧な説明をもって留意点が記されてされており、これからの日本の保育現場にとって「共生の原理」を解き明かす重要が読み取れるものである。本論は、そのような保育現場の共生をとりまく議論を、幸福の国フィンランドにおける子どもの生活世界の中心となる「親」と「保育者」の様相から読み解きたい。

2. フィンランドの保育現場と保育者

フィンランドの保育所（パイヴァコティ／Päiväkoti）は、直訳すると「昼間の家」である。多くの子どもは、1歳前後から6歳まで、基本的に平日の8時～4時頃までを保育所で過ごしている。フィンランドでは伝統的に多くの家族が、核家族・共働きである。そのため、保育施設の量的・質的充実が重要な国や自治体の役割である。

ヘルシンキ市の公立保育園に勤務するA氏は、保育士として7年勤務している。中学生と小学生の子どもを育てながら、月曜日から金曜日までフルタイムで働く。A氏によると、保育所勤務はハードで、現場はここ数年人手不足の状態が続いていると話す。フィンランドでは、保育士一人あたりの担当できる子どもの人数は、0～3歳児は4人まで、3～6歳児は、7人までと定められている。しかし、ク

ラスの実情によっては、子どもを十分に支援することが難しいと続ける。たとえば、クラスの半分以上の子どもが移民である場合や何らかの課題をもつ場合である。言葉や生活習慣へのサポート、親への対応に、他の子どもよりも時間をかけて関わる必要があるからである。また、保育者が、そのような状況に不慣れな場合もあることを挙げた。さらに、代理教員の存在について次のように話してくれた。

福利厚生が進むフィンランドでは、病気休暇や年休などの有休をすべて消化するのはあたりまえです。また、自身や家族の体調不良の場合には、当然の権利として職場を休みますよ。したがって、そのための代理教員の登録システムが活用され機能しています。ところが、私の職場の同僚で、しょっちゅう休む教員がいます。同じチームとして働く場合、保育に関する計画が一緒に立てられないことはもちろん、意思疎通ができないことは大きな問題です。また、その保育者が休んだときに来てもらう代理教員には、正直当たりはずれもありますし、急な対応で代理教員が来られない場合もあるんです。あるとき、子どもが喜ぶ「悪ふざけ」だけをする教員がいて、あまりに見ていられなかったので注意をしました。果たして子どもが楽しいだけでよいのか？といまだに疑問が残っています。代理教員のシステムは、困ったときにはとてもありがたいです。しかし、フルタイムでないだけに責任が伴わない仕事です。勉強して資格を持って、あえてフルタイムで働かず（責任がなく気楽だからという理由で）代理教員になることを望む人も多いのです。そのことに危機感を覚えます。

また、実習生の傾向について、次のように話す。

先日、実習生（移民）がやって来ました。初日は欠席でした。二日目には朝から来たのですが、9:30頃に体調不良を訴えたので、緊急で帰宅させました。緊張していたのかな、と思っていました。しかし、結局翌日から無断欠勤が続いています。実は、同じような例は時々あるとききます。フィンランドでは、自己責任という名のもと、本人の判断で「続けないこと」も権利とはいえ、保育士の仕事をいかに甘くみていたかがよくわかります。こちらは、決していじわるを言ったり、つよく叱ったりしていませんで

した。ただ、正確な理由はわかりませんが、保育の仕事を選ぶ移民の中には、自国の子育てや仕事への態度との違いに戸惑う人も多いように思います。

フィンランドの保育現場での事例から、日本の保育との類似点、相違点を垣間見ることができる。

子どもや保育者自身の自己決定力を大切にするフィンランドの保育現場では、それを統括する責任者の役割も重要となる。ヘルシンキ市内からほど近い、別の園を訪れた際、園長B氏と次のような会話をした。調査者が「(あなたは) 責任者としてこの園をよくするためにどんなことをしたいですか?」と尋ねた際の回答である。

私は、この園の子どもたちがのびのびと生活するためのあらゆることをしたいと思っています。そのため、園長がみんなに信頼されることが大事だと思うのです。スタッフや親とのコミュニケーションを大事にしています。今、デージー (Daisy) というシステムで、携帯電話でも多くの管理 (スタッフのシフト、今の動き、子どもの数や様子など) や情報共有ができるようになっていますが、直接話すことはとても大事だと思います。もちろん、保護者の中にはいろいろな事情で電話をもっていない人もいますから。また、私自身、将来はここでの経験を生かして、保育者養成にかかわりたいという夢を持っています。そのために、今も現場はもちろん、研修会にも参加して、学びを深めています。

B氏の園長としての態度は、目先の保育計画や支援を示すものではなかった。保育者集団の中での自分の役割の認識、自身のキャリア形成に基づいた点を整理した即座の回答であった。B氏の園は、視察対応に慣れている園ではない。しかし、フィンランドでは、このように、園に突然訪問しても、保育者が自身のキャリアを整理して語ること、園長室にマインドマップが貼ってあることなどは共通している。B氏の園内では、この時期、新学期の試みとして、大きな箱に入れた玩具のパッケージを数週間ずつ違うクラスに移動させ、その反応やかかわりを記録し、実証的な研究を進めていた。これは、専門家の意見を取り入れた、園独自の保育研究である。

また、園内に併設されている地域子育て支援センターには、当日に移民の家族が保育所入所の相談に

訪れていた。園長として、そのような外部とのかかわりについても一定の情報を把握せねばならず、その仕事量は予想よりもはるかに多い。おそらくフィンランドの別の職業と比較しても、保育者は責任が重いことが想像できる一日であった。

A氏、B氏の話す世界はフィンランドの保育現場のすべてではない。しかし、保育現場の労働環境、保育者の適性やその国の保育文化の理解について、日本と同様に課題も残ることが読み取れた。同時に、保育者としてのキャリア教育については日本への示唆もある。

3. フィンランドの保育者養成と課題

フィンランドでは、保育所で働くための保有資格 (免許状) は大きく2種類あり、それぞれの資格保有者が、同じクラスにペアとなって保育を実践している。具体的には、保育・幼児教育専門家 (学問としての子どもの発達や教育の基礎を持つ) である「ラストエンタルハンオペッタヤ」(Lastentarhanopettaja) と、保育福祉の専門家 (子どもの世話から医療的な対応も含む) である「ラヒホイタヤ」(Lähihoitaja) となる。保育・幼児教育等と社会福祉・医学等の専門性をもった両者が協力しあうことで、クラス活動が展開されていく。

ラヒホイタヤになるため、現在、保育者養成校に通うC氏に話を聞いた。フィンランドの場合、最初は保育・福祉・医療・介護等の基礎を社会福祉系の専攻に所属して学習し、2年目以降に保育所、障がい者施設、高齢者施設など、自身の職場を見据えた学びをコースに分かれて始めることになる。C氏は、移民の保育者養成クラスに所属し、20人のクラスメイトはムスリムの学生が15人を占めるという。ある日、クラスで「特別な子どもがやってきたときの対応は?」というディスカッションがあった。

その日、4、5人がグループになり、①視力の悪い子ども②障がいのある子ども③海外から来て言葉が通じない子ども、という3つの設定について話し合いました。驚いたのは、③の設定については「特に何もしなくていいんじゃない?」という反応が起き、討議の対象にならなかったことです。私は驚き、「それは間違っている」と言いましたが、メンバー

の中には明らかに理解が浅いのではないかという学生がいました。このときは、どのような対応があるかという方法論よりも、彼らの態度のほうに印象に残りました。

フィンランドには、移民や外国籍、両親の出身地が違ふ、家庭での文化が保育園や学校と違ふなど、様々な子どもが日常的に生活している。一方で、その状況に慣れすぎて子どもや家族の人権が無視されているのではないかと見まがう場面に遭遇することも多い。保育現場における専門性を磨くことは日本と同様不可欠である。

別の保育者養成校に通ったD氏にも話を聞いた。D氏は海外出身であるが、移民クラスではなく一般クラスに所属した。クラスメイト20人中16人はフィンランド人で、残りの4人は外国籍であったが、フィンランド語が堪能で、フィンランド生活を既に何年も送っていた。D氏は、そのメンバーに囲まれて学び、公立保育所へ就職した。しかし就職後、出身地が違ふと、保育観や、子どもへの振る舞いが大きく異なることを実感したという。たとえばある出身地の保育者や実習生に共通していたのは、「とにかく自分で考えてやってみる、わからなくても、できなくてもやってみる」という行動力であった。あるとき、流してはいけない水場に、溶けないものをいろいろ流してしまい、水が詰まってしまったことがあった。そのようなことが、たびたび同じ地域の出身者からおきた。あとから、彼ら／彼女らの国では、そのような処理が一般的であって、慎重さに欠けた行為とは言い切れず、また本人たちにも悪気はなく、失敗したとも思っていなかったことがわかった。しかし、フィンランド出身保育者との相互理解が進むまでには時間を要し、その間はお互いにとても居心地が悪かったという。また別の場合、出身地によって子どもへのしかり方が極端に厳しい、保護者への対応が厳しいなど、自身が受けた子育て観に基づくものが強く出ていると感じる場面もあるという。「フィンランドの一般家庭の感覚を共有できず、保育園の方針をなかなか受け入れにくい場合、働き続けることは難しいのではないかと続けた。この事例をもって「保育観の違いの所在」を明らかにすることは不可能である。しかし、多文化共生の土台が国として整うフィンランドで、今、新しい保育の局面を迎えていることは示唆できる。保育の仕事は過

酷であり、人手不足は緊急対応が必要となる。日本でも、佐々木(2014)が指摘するように多文化共生時代の保育者の在り方は多様化していくであろうし、海外出身者の保育へのかかわりは注目されるだろう。フィンランドで出身国の違ふ保育者の連携を目にするたび、多様化した保育現場の新しい姿だと考える。今後、どのような方向性をもって保育者養成課程を整えていくか、移民の保育者養成に向かい合うか、どのような学びで保育者を目指すのかは、大学や専門教育機関の一つの課題であり、大きな挑戦と可能性を秘めた、多文化共生時代の保育におけるテーマとなるだろう。

4. 親をめぐる子育て社会

フィンランドで様々な家族に会い、語らうと、親になることへのプレッシャーが少ない国であることを感じる。たとえば「母親らしく」「父親らしく」という「らしさ」の強制が日本に比べると圧倒的に弱く、親同士の他者へ関心を示す切り口が「ママとして」「パパとして」という家庭での役割ではなく、本人の趣味や専門性や将来の夢などであることも多い。若い夫婦に子どもがいるかないかで詮索する人が少ない一方、同じ年の子どもを持つだけで見知らぬ人と大いに盛り上がり、その生活習慣の違いに驚き、さらに楽しむ光景がある。他人の子育てには無関心かと思えばそうでもなく、赤ちゃんの話題で盛り上がる若い母親たちの横を通り過ぎたあとに「自分も昔はあんな風に、子どもの髪の色が変わってきたというだけで自慢したり盛り上がりしたりしたなあと懐かしく思う」と、私にそっとささやく人もいた。

ヘルシンキ市内に生まれ育った母親E氏は、子どもが9歳と7歳になり、音楽の仕事や趣味の料理を楽しむ時間が何より楽しみだという。しかし、ここ数年、気になったのが周りの母親たちの生活であったという。

いつも自分らしく生活していけばよいと思っていたんだけど。今も新しいことに挑戦している。でも、子どもが小さくて仕事が忙しい時に、ほかの家族の生活が気になってきた。一つのきっかけがインスタグラムでの他者からの発信だった。綺麗な朝ご

飯、家族の休暇など、知り合いの美しい世界ばかり見ていると「おお、私はなんてダメな母親なんだろう」って一瞬思った…。もちろん、今は、できるだけ見ないように、見ても「私は大丈夫。他の人とは違う特別な存在」と考えるようにしている。

フィンランドの国営放送局YLEスウェーデンで制作中の「Sjukt Perfekt (憂鬱なほどに完璧)」は、2019年春にフィンランドでも放送予定のリアリティ番組である。ソーシャルメディアによって翻弄されがちな若い世代が抱える、外見の問題を取り上げている。向かい合う人々の姿を通し、何を訴えかけるのであろうか。静かに、しかし大きく流れを変えようとするフィンランド社会で、果たして個を尊重した共生の原理として、何が受け継がれているのであろうか。ヘルシンキ在住の日本人F氏と話した際、日本人コミュニティの話題になった。

この国に20年近く住んで変わってきたことはたくさんあるけれど、日本人コミュニティについていえば、多様化してきた、人が増えた、離婚が多くなった、の3点がある。ここで困るのは、国際結婚カップル(出身地が違うカップル)の離婚によって、子どもの両親どちらかが日本人なのに、もう一人の親が日本のアイデンティティーをつぶそうとすること。これは、悲しいよね…。

また、別の対談の中で、日本人G氏は、フィンランドでの生活について次のように話す。

フィンランドにきて、長く住んですごく楽なことは、多様性を同調させない社会であることです。どこの国にいても「日本が見え隠れする私」はいるけれど「それもよし」としてくれる社会。いまだに(フィンランドで)嫌なことも、困ることもありますよ。でも、日本人だから、親だから、という差別的な攻撃を直接受けたことはありません。助けてもらったり、提案してもらったりしたときでさえも、それを「拒否する、選ばない(同調しない)」権利がここにはある。それは日本人としての自分を、ある意味認めてくれているんですよね。それは楽でした。きっと、子どもたちもそうだと思いますし、それを願います。

F氏、G氏の言葉を通し、海外で暮らし、親になるプロセスや直面していく内容とともに、フィンランド社会で育まれる子どものアイデンティティー形成についても考えることができる。それは、フィンランド社会に根付く共生の原理につながる重要な問題提起かもしれない。

5. 子育てをとりまく課題

ヘルシンキ在住のH氏は、長くスウェーデン系フィンランド人が居住する地区で保育者を務め、その後小学校教諭も経験した女性である。保育・教育の仕事に長くかかわる中で、現在もフィンランドの政策について注目する一人である。近年の子育て支援政策について見解をきいた。

この2、3年の間、政府から「幼少期の保育経験が大切という」プレッシャーというか、こういった内容を聞く機会が多くなりました。あるスウェーデンの研究成果の「子どもは小さいときに保育を経験したほうが人生がうまくいく」というものを引用しています。私は、それだけで言い切ることや、人生がうまくいくことを(前提に)考えることはおかしいと思います。もちろん、フィンランド人の多くが、そのこと(政府の見解や内容)に対して疑問視する意思を表明していました。フィンランドの子どもは、ヨーロッパ全体からみても保育園に入るのは遅いほうです。中には、3歳になってからとか。親が自宅で子どもの世話ができる、親が面倒をみられる、ちゃんと職場に戻れて手当もらえるシステムになっていることがあるから。それはとても大切でした。

このように話したあと「選択できる自由があるべき」と話をつづけた。

フィンランドの、子育てをゆっくり楽しむ(選択がある)システムは、同時に親にとってはあまりよくないのでは?という一部の見解も含んでいたんです。それは、子育てをしながら仕事をしていた、私自身が良くわかります。たとえば、ブランクがあると、まず年金が少ない。また、ヘルシンキは物価が高いので、実は共働きをしたい家族もいる。みんな働いているからという焦りもある。また(フィン

ランド人にとって) 仕事をするのもとても大事。つまり、子どもとゆっくり過ごす1年~3年も大切なわけで、どちらかは選べないけど、少なくとも職が必ず残っているから、安心して仕事を休める環境がありました。私は、選べる環境がもっとも大事だと思います。子どもによっては、(保育園のような) 大きいグループが苦手な場合もある。しかし、ある政治家は、これまで最高で3年とれた育児休暇を、2年にしようとしています。「そんなに長く子どもといたいのか？」というメッセージを出しているように思いました。それに同調する動きもあります。そのような制度に変わった場合、新しい建物が必要になり、保育者も足りなくなることは明らかです。

H氏は、乳幼児期からの保育を否定しているわけではない。一方で、国としてこれまで機能してきた個々の選択の幅を狭め、多様な子育てを排除するような決定に対し、説得力のある根拠を求めていた。

保育をとりまく環境が変化するとともに、多文化共生社会の課題も変化し、人々の生活を動かす。子どもの生活世界に目を向けることの必要性を問い、必ず子どもに返るべき政策と共生の原理を求める議論をしたい。

謝 辞

本調査にご協力いただきました、フィンランドの保育関係者およびインタビューに快く応じてくださいましたご家族に感謝申し上げます。

付 記

本研究は2016年度科学研究費補助金(課題番号24730715)「フィンランドにおける多文化保育の研究」における成果の一部である。

引 用

フィンランド国営放送Yleホームページ

<https://svenska.yle.fi/artikel/2018/07/11/svenska-yles-nya-onlinesatsning-sjukt-perfekt-soker-deltagare> (閲覧日: 2018年9月26日).

宮島喬. (2014) 『外国人の子どもの教育: 就学の現状と教育を受ける権利』 東京大学出版会.

森田京子. (2004) 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティック—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィ—』 新曜社.

三井真紀・韓在熙・林悠子・松山有美. (2017) 「日本における多文化保育の政策・実践・研究の動向と課題」『九州ルーテル学院大学』 VISIO47, pp.31-41.

佐々木由美子. (2014) 「多文化共生保育における外国籍保育士の役割」『こども環境学研究』 10(2), pp.58-65.